

練習及び競技中の注意点

1. 選手

- ① コートへの入退場は、それぞれ指定された時間に、速やかにコートに集合する。
- ② コートサイドにはかごやドリンクケースは設置しないので、バッグ等を持参し、コートサイドに置き、ドリンクも各自のバッグに収容する。こぼした時は、モップ等で拭きとる。
(自分のタオルを使用して拭かない)
- ③ ラケット・タオル等の用具の貸借はしない。
- ④ 床の汗拭きは、モップもしくは所定の用具を使用する。
- ⑤ 汗をコート内やコートサイドに投げない。
- ⑥ 本部提供の使用済みシャトルは、各コート主審台下のポリ袋に入れる。
- ⑦ 消毒グッズ等を設置するので、適宜、活用する。

2. 審判員

- ① 消毒グッズ等を設置するので、適宜、活用する。

3. 監督・外部指導者

- ① 消毒グッズ等を設置するので、適宜、活用する。

審判員の仕事

1 審判担当の割り振り

<団体戦>

1. 試合は、3コートを使用し、同時進行で行う。(1コート4名×3コート=12名)
・コート番号の早い方から順に、第1ダブルス・シングルス・第2ダブルスを行う。
2. 審判は、タイムテーブルの審判担当校(2校×6=12名)が担当する。
 - ①第1ダブルスは、チーム番号の早い学校が担当する。(4名)
 - ②シングルスは、審判担当校2校で担当する。(4名)
・チーム番号の早い学校が、主審・得点係を担当する。(2名)
・チーム番号の遅い学校が線審(2名)を担当する。(2名)
 - ③第2ダブルスは、チーム番号の遅い学校が担当する。(4名)*事前に担当者を決めておく。

(例) 男子試合番号6 (4. A中 v s 5. B中)

審判担当は、男子試合番号7の (6. C中 v s 7. D中)

試合番号	コート番号	試合	審判員
男子2	7	第1ダブルス	C中4名(主審・得点係・線審2)
	8	シングルス	C中2名(主審・得点係)、D中2名(線審)
	9	第2ダブルス	D中4名(主審・得点係・線審2)

<個人戦>

1. 審判は、タイムテーブルの審判担当選手が行う。

2 主審の仕事

1. コートに行く前に以下の準備をする

- 各自、筆記用具を持参する。
- 試合のコールがされたら、本部からセットを受け取る。
⇒シャトル係に「男女の別」「試合番号」「コート番号」を伝える。
本部からの必要シャトル数を確認し受け取る。(例：女子試合番号2番、2コートです)

2. コートに行ったら以下のことを確認する

- 線審のイスの位置（ダブルス、シングルス）を確認する。
- 得点係がいるかを確認する。
- 選手の服装を確認する。
 - ・シャツは規定のものか（審査合格品または関東Tシャツ）
 - ・ゼッケンの文字の大きさが正しいか、4か所留めになっているか
 - ・あいさつ、各ゲーム開始時にシャツを入れさせる
- 監督および外部指導者の服装を確認する。
 - ・IDカード（監督証・外部指導者証）の着用
 - ・シューズの着用（スリッパ、サンダルは不可）
- 応援生徒（ベンチ入りできる人とその数を確認）を確認する。
- 選手の荷物の置き場を確認する（主審の脇・ショートサーブスラインあたり）。
- 選手が集まった際に、各人の115cmの位置をポストの印で確認する。
- シャトルの確認をする。
 - ・本部提供のシャトルを使用するか、持ち寄りのシャトルを使うか。（意見が違う場合は、トスで決める）
 - ・持ち寄りのシャトルを出す順番をトスで決める。
- トスをして「エンドを選ぶか」「サーブ・レシーブを選ぶか」を決めさせる。
- ダブルスの場合はサーバーとレシーバーを確認する。
- 試打はさせない。（フットワークは可）
- 審判台に上がり、必要事項をスコアシートに記入する。
(サーバー&レシーバー、L・R、試合開始時刻)
- コールをして試合を始める。
 - ・試合中は線審および得点係とアイコンタクトを取る。
 - ・線審が担当ラインのジャッジをしたら、頷いて確認する。
 - ・線審が担当ラインのジャッジをしなければ、線審にジャッジをさせてから主審は得点のコールをする。
 - ・あきらかに線審の判定に誤りがあれば、オーバーコールをして判定を正しいものに変える。
 - ・判断できないことがある場合は右手を挙げてレフェリー（または競技審判部長等）を呼ぶ。

3. 試合が終わったら以下のことを行う

- 「ゲーム」とコールし、速やかに、スコアシートに勝者サインをしてもらう。
- 「マッチワンバイ…」と試合終了のコールをし、審判台を降りる。
- 審判台を降りたら速やかに主審セットを本部に返却する。
(スコアボード、コイン、カード)
- シャトル係に本部提供の未使用シャトルを返却する。
(「男女の別」「試合番号」「コート番号」「本部提供の使用済みシャトル個数」を伝える)
- スコアシートに残りの必要事項を記入する。(審判台でやらず戻ってからやる)
①終了時刻②使用シャトル数③得点・マッチ数④主審サイン（他に漏れはないですか?）
- スコアシートをレフェリーや競技審判部長等に提出し、チェックを受ける。

※『異議の申し立て』について

日本バドミントン協会大会運営規程の第36条において、
「審判員の判定に対して疑問のある場合は当該プレーヤーが、団体戦の場合は当該プレーヤーと監督に限り質問することが認められている。ただし、抗議あるいは異議であってはならない。」とある。



○主審が生徒の場合、

「主審は団体戦や個人戦において質問があった場合や判断がつかない場合は、速やかにレフェリーコール（右手を挙げ、線審又は得点係にレフェリーを呼びに行かせる）すること。」

3 線審の仕事

- 椅子には浅く腰掛け、背筋を伸ばして座る。
- 膝を組んだり、両足を前に投げ出したりしない。
- シングルスとダブルスでジャッジをするラインが異なるので注意する。
(必要に応じて椅子を動かす)
- シャトルが落下すると思われるラインの延長方向に体を動かしてシャトルを見る。
- ジャッジは姿勢を低くし、のぞき込むようにして見る。
- シャトルがコート面に落ちるまでジャッジはしない。
- よそ見をせず、自分のラインに責任を持つ。
- 真剣に、そして自信を持って線審を行なう。
- 試合終了後、主審が審判台を降りるまで、そのまま椅子に座っている。審判台を降りたら、席から離れてよい。

【ジャッジ】について

*主審とのアイコンタクトが重要になる

<インの時>

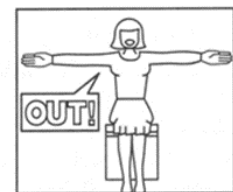
- 無言のまま右手でラインを指す。
(おおよそラインから1mの範囲は「イン」のシグナルを出す)



シャトルがコート内に落ちたとき

<アウトの時>

- プレーヤー、主審、観客にわかるよう、「アウト」をコールする。
(「ア」を大きな声で言うと聞こえやすい)
- 両腕を開き、手のひらを前に向けた合図をする。



シャトルがコート外に落ちたとき

<線審が判定できない時>

- 判定できない場合は両手で目を覆う。
- 主審が判定できる時は主審の判定が採用される。
- 主審も判定できない時は「レット」になる。

<その他>

- 主審の指示があった場合、汗拭きなどのコート整備を行なう。



シャトルの落下点が見えなくて、判定できなかったとき

4 得点係の仕事

- 主審の得点コールを聞いてから得点表示を行なう。(コール前に得点表示に手を触れない)
- 試合中はラリーに集中し、間違いのないようにする。
- ゲームカウント表示も忘れずに行なう。団体戦はマッチカウント表示も忘れずに行なう。また、団体戦の場合は、試合に勝った方の「白の数字」をめくる。3コート同時展開なので、他のコートの結果を確認しマッチカウント表示を揃える。
- ファイナルゲームのチェンジエングスの際は得点を正しく入れ替える。